

保育者養成課程における領域「言葉」指導への SDGsに関する観点の導入についての一考察

木 村 重 子 幼児教育科

（2024年10月1日受理）

〔 要 約 〕

本研究では、保育者養成課程における領域「言葉」指導への持続可能な開発目標（SDGs）に関する観点の導入について、現状を調査し、導入拡大に向けた課題について検討した。保育者養成課程で使用されている領域「言葉」の教科書におけるSDGsへの言及の程度を調査するとともに、保育者養成課程で学ぶ短期大学生のSDGsに関する意識を調査した。その結果、領域「言葉」の教科書にはSDGsについてほとんど記載はなく、短期大学生の意識もSDGsに関しては領域「環境」に関するものが多く、領域「言葉」への関心がほとんどないことが示された。幼稚園教諭や保育士などの保育者を養成する現場においては、子どもたちが将来持続可能な社会の創り手となることができるように、まず学生自身がSDGsについて理解を深め、「聞く」「考える」「話す」「書く」など、「言葉」の基礎を培うことが必要であることが強く認識された。

I. はじめに

I-1 持続可能な開発目標（SDGs：Sustainable Development Goals）

近年、貧困、紛争、地球温暖化現象、資源の枯渇…そして新型コロナウイルス感染症等々、これまでになかったような様々な問題が溢れており、私達の生活を脅かし安心安定して暮らすことができないような現状がある。

ユニセフは、これまでMDGsといった、2000年に採択され2015年を達成期限とした8つの目標、21のターゲット、60の指標が設定された国際的なミレニアム開発目標を掲げてきた。¹⁾しかしさらなる危機感から、2015年9月「国連持続可能な開発サミット」が開催され、150を超える首脳が参加して、課題を整理し、解決方法を考え、MDGsを受け継ぐ2030年までの新たな目標となる「持続可能な開発目標（以下、SDGs）」が採択された。その内容は、17の目標と169のターゲットから構成され、人権、経済・社会、地球環境、様々な分野にまたがった課題が分類されている。このSDGsは、ユニセフがSDGs採択前から重視してきた公平性のアプローチ、『誰ひとり取り残さない』を掲げ、①MDGsで達成できなかった課題、②MDGsには含まれていなかった課題、③新たに浮上してきた課題、を包括的に含んだ、先進国も途上国も取り組むべき普遍的な目標であるとしている。²⁾

さらに子どもに関してのSDGsを以下に示している。

〈SDGsにおける子どもの位置付け〉

SDGsを定めた文書『我々の世界を変革する：持続可能な開発のための2030アジェンダ』の「宣言」で、SDGsがめざす世界は、「子どもたちに投資し、すべての子どもが暴力や搾取から“解放される世界”とされ、子どもは、守られるべき“脆弱な人々”にも含まれそれだけではなく、“重要な変化の担い手（critical agents of change）”と位置付けられていることがとても重要である」と記されている。また、子どもたちがSDGsについて学び、人権やジェンダー平等、平和と非暴力、地球市民の考え方など、持続可能な開発の実現のために必要な知識を身につけ（SDGsターゲット4.7）、SDGsの実施に主体的に関わっていけるよう、ユニセフや日本ユニセフ協会はサポートしている。²⁾

〈子どもたちの課題と目標〉

SDGsには、ユニセフ等の働きかけを受け、子どもに関連する多くの課題が含まれ、以下のような考えを発信している。²⁾

◇不平等、格差をなくすための目標

目標1（貧困の撲滅）、2（飢餓の撲滅）、3（健康）、4（教育）、5（ジェンダーの平等）、6（安全な水と衛生）、8（人にふさわしい雇用）は、“すべての子ども（人）”“あらゆる場所”と謳い、これらの課題において不平等・格差をなくしていくことを目指し、さらに、目標10は国内および国家間の不平等の削減そのものを掲げている。

◇すべての子どもを暴力・虐待から守るための目標

目標16は、平和で誰もが受け入れられる社会の実現を掲げている。目標16の下に子どもに対するあらゆる形態の暴力の撤廃、すべての人への出生登録の提供、目標5の下に女子に対する暴力や児童婚の撤廃、目標8の下に児童労働の撤廃が含まれるなど、SDGsには様々な子どもの保護の課題が含まれている。

◇子どもたちに持続可能な環境を残すための目標

目標13（気候変動への対応）、14（海洋資源の保存）、15（地球環境の保護）が地球環境に関する目標であり、また、目標7（持続可能なエネルギー）、11（安全なまち）、12（責任ある消費・生産）等にも、人びとの生活の豊かさが自然と調和する社会・経済のあり方が掲げられている。

これらSDGsについて叫ばれてから久しいが、我が国においてはようやく最近、新聞や雑誌、テレビCMや広告等でもよく目にするようになり、私達の生活に浸透してきている。こうしたなか大学をはじめとした学校や保育施設等においてもSDGsに対する取り組みはすでに始まっている。

中学校においては、学習指導要領の技術・家庭科の目標に、「よりよい生活の実現や持続可能な社会の構築に向けて、生活を工夫し創造しようとする実践的な態度を養う」とある。³⁾

この「持続可能な社会の構築に向けて」我が国の学校では様々な取り組みがなされている。

鎌田（2021）は、「持続可能な社会の構築に向けて」SDGsについて理解したり、SDGs達成を目指した解決策を多角的な視点で考えたり、根拠を持って最適解を見付けたりすることで、問題解決につながる新たな価値観や行動の変容をもたらす持続可能な社会の実現を目指す生徒を育成することが期待できるという研究仮説のもと、「持続可能な社会の構築に向けた消費生活」に関する授業の実践を試みた。この研究の成果としては、よりよい生活を目指す視点で自分の生活を見つめさせ、生活の中の課題がSDGsのどの目標と合致しているのかを考えさせるところから始めたことで生徒が主体的に問題解決に取り組むことができたという。また、批判的思考力の育成が重要であると考え、問題解決的な学習の流れの中にいくつかの問いを提示し、様々な角度から論理的に考え判断する場面を意図的に設けたことにより、これまで解決策が見つからば満足していた生徒がさらに最適解を求めて探求する姿が見られたという。⁴⁾

I-2 持続可能な開発のための教育

（ESD：Education for Sustainable Development）と幼児教育

ESDとは、2002年の「持続可能な開発に関する世界首脳会議」で我が国が提唱した考え方であり、同年の第57回国連総会で採択された国際枠組み「国連持続可能な開発のための教育の10年」（2005－2014年）や2013年の第37回ユネスコ総会で採択された「持続可能な開発のための教育（ESD）に関するグローバル・アクション・プログラム（GAP）」（2015－2019年）に基づき、ユネスコを主導機関として国際的に取り組まれてきた。これらの現代社会の問題を自らの問題として主体的に捉え、人類が将来の世代にわたり恵み豊かな生活を確保できるよう、身近なところから取り組む（think globally, act locally）ことで、問題の解決につながる新たな価値観や行動等の変容をもたらす、持続可能な社会を実現していくことを目指して行う学習・教育活動である。そして、SDGs採択後は、「持続可能な社会の創り手を育む教育」と定義されている。2014年の名古屋で開催されたESDの総括会議においては幼児教育が重要な鍵となることや幼児教育でのESDが進んでいることが評価された。²⁾

乳幼児期からESDに取り組む意義として、上垣内によると、「幼児期は生活の基本的な態度や価値が形成される時期であるので、幼児期からの取り組みが新たな価値観をもつ未来の担い手を育てることにつながっていく。そして、幼児期は保護者の養育下にあるゆえに、子どもを通して保護者は家庭へも影響が及ぶので社会への影響力も大きいと考えられる。まさに幼児教育はESDの鍵、人格形成の基礎を培う乳幼児期のESDは生涯にわたるESDの基盤といえる」と述べている。⁵⁾

上垣内（2022）は、ESDと幼児教育・保育に見いだされる共通性を示し、このことから幼児教育そのものがESDであるとして、以下の点が重要だと述べた。⁵⁾

ESDが目指す教育

- ① 学び手の文化背景や生活環境が尊重される
- ② 目の前の学習者に合わせた教育が行われる。
- ③ 学習者の持ち込む文化的価値を認識する。
- ④ 自分がどう生きるかを考えるからこそ生活を題材として教育が展開される。

幼児教育・保育の基本となる考え

- ① 子ども自身のもつ生活経験を尊重する。
- ② 主体的活動として遊びを大切にする。
- ③ 周りの環境との関わりから学ぶ。
- ④ 自然とのかかわりを重視する。
- ⑤ 園と家庭・地域との連携が不可欠である。

I-3 5領域と領域「言葉」

幼稚園教育要領の前文には、「これからの幼稚園には、学校教育の始まりとして、こうした教育の目的及び目標の達成を目指しつつ、一人一人の幼児が、将来、自分のよさや可能性を認識するとともに、あらゆる他者を価値ある存在として尊重し、多様な人々と協働しながら様々な社会的変化を乗り越え、豊かな人生を切り拓き、持続可能な社会の創り手となることができるようにするための基礎を培うことが求められる」と記されている。⁶⁾

5領域とは、幼稚園教育において育みたい資質・能力を幼児の姿から捉えたものがあり、内容は、ねらいを達成するために指導する事項である。各領域は、これらを幼児の発達の側面から、心身の健康に関する領域「健康」、人との関わりに関する領域「人間関係」、身近な環境との関わりに関する領域「環境」、言葉の獲得に関する「言葉」、感性と表現に関する領域「表現」、としてまとめ示したものである。⁶⁾

その中で、本研究で取りあげる平成29年改定の幼稚園教育要領における領域「言葉」では、「経験したことや考えたことなどを自分なりの言葉で表現し、相手の話す言葉を聞こうとする意欲や態度を育て、言葉に対する感覚や言葉で表現する力を養う」領域であり、ねらいと保育内容、内容の取扱いが次のように記されている。⁶⁾

1 ねらい

- (1) 自分の気持ちを言葉で表現する楽しさを味わう。
- (2) 人の言葉や話などをよく聞き、自分の経験したことや考えたことを話し、伝え合う喜びを味わう。
- (3) 日常生活に必要な言葉が分かるようになるとともに、絵本や物語などに親しみ言葉に対する感覚を豊かにし、先生や友達と心を通わせる。

2 内容

- (1) 先生や友達の言葉や話に興味や関心をもち、親しみをもって聞いたり、話したりする。
- (2) したり、見たり、聞いたり、感じたり、考えたりなどしたことを自分なりに言葉で表現する。
- (3) したいこと、してほしいことを言葉で表現したり、分からないことを尋ねたりする。
- (4) 人の話を注意して聞き、相手に分かるように話す。
- (5) 生活の中で必要な言葉が分かり、使う。
- (6) 親しみをもって日常の挨拶をする。
- (7) 生活の中で言葉の楽しさや美しさに気付く。
- (8) いろいろな体験を通じてイメージや言葉を豊かにする。

- (9) 絵本や物語などに親しみ、興味をもって聞き、想像をする楽しさを味わう。
- (10) 日常生活の中で、文字などで伝える楽しさを味わう。

3 内容の取扱い

上記の取扱いに当たっては、次の事項に留意する必要がある。

- (1) 言葉は、身近な人に親しみをもって接し、自分の感情や意志などを伝え、それに相手が応答し、その言葉を聞くことを通して次第に獲得されていくものであることを考慮して、幼児が教師や他の幼児と関わることにより心を動かされるような体験をし、言葉を交わす喜びを味わえるようにすること。
- (2) 幼児が自分の思いを言葉で伝えるとともに、教師や他の幼児などの話を興味をもって注意して聞くことを通して次第に話を理解するようになっていき、言葉による伝え合いができるようにすること。
- (3) 絵本や物語などで、その内容と自分の経験とを結び付けたり、想像を巡らせたりするなど、楽しみを十分に味わうことによって、次第に豊かなイメージをもち、言葉に対する感覚が養われるようにすること。
- (4) 幼児が生活の中で、言葉の響きやリズム、新しい言葉や表現などに触れ、これらを使う楽しさを味わえるようにすること。その際、絵本や物語に親しんだり、言葉遊びなどをしたりすることを通して、言葉が豊かになるようにすること。
- (5) 幼児が日常生活の中で、文字などを使いながら思ったことや考えたことを伝える喜びや楽しさを味わい、文字に対する興味や関心をもつようにすること。

上記の下線部は、筆者が、特に持続可能な開発目標SDGsと関連し、幼稚園教育要領の前文にある「持続可能な社会の創り手となるために」必要な基礎と育みたい資質・能力であると考え、“幼児と保育者のかかわり”“伝える”“聞く”“考える”“話す”等に関連し、重要だと考えた部分である。

4 「幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿」との関連

平成29年幼稚園教育要領の改訂により導入された「幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿」は、ねらいや内容に基づいて、各幼稚園で幼児期にふさわし

い遊びや生活を積み重ねることにより、幼稚園教育において育みたい資質・能力として、「知識および技能の基礎」「思考力、判断力、表現力の基礎」「学びに向かう力、人間性」の具体的な姿である。この「幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿」において筆者が領域「言葉」との関連が深いと考えるのは以下の2つである。⁶⁾

〈8 数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚〉

遊びや生活の中で、数量や図形、標識や文字などに親しむ体験を重ねたり、標識や文字の役割に気付いたりして、自らの必要感に基づきこれらを活用し、興味や関心、感覚をもつようになる。

〈9 言葉による伝え合い〉

保育者や友達と心を通わせる中で、絵本や物語などに親しみながら、豊かな言葉や表現を身に付け、経験したことや考えたことなどを言葉で伝えたり、相手の話を聞いたりし、言葉による伝え合いを楽しむようになる。⁶⁾

下線部は、筆者が、特に持続可能な開発目標SDGsと関連し、幼稚園教育要領の前文にある「持続可能な社会の創り手となるために」必要な基礎と育みたい資質・能力であると考え、“幼児と保育者のかかわり”“伝える”“聞く”“考える”“話す”等に関連し、重要だと思われる子どもの姿である。

そのほかにも、〈4 道徳性・規範意識の芽生え〉では、いざこざのような場面において友達と折り合いをつける姿、〈5 社会生活との関わり〉では、情報を伝え合う姿、〈6 思考力の芽生え〉では、考えたり考え直したりする姿など、様々な場面で領域「言葉」に関わる子どもの姿をみることができる。これらどの項目においてもSDGsに向かうための社会の創り手となるためには必要な基礎と育みたい資質・能力であると考え、特に幼児には必要な経験であると考えられる。

I-4 持続可能な開発目標SDGsと幼児教育・保育との関連について検討した従来の研究

次に、SDGsと幼児教育・保育との関連について検討した従来の研究について述べる。

谷口（2020）は、社会の持続可能性を達成するためには、より自主的で多様な考え方ができる子どもを育てていく必要があると、平成29年に告示された幼稚園教育要領に示された方針とSDGsやESDとの関連性を明らかにした。また、保育者教育のあり方を検討するために、現在利用されている保育者養成課程用の教科書から保育者養成にSDGsやESDの考え方がどれだけ取り入れられているのかを考察し、現行の幼稚園教育

要領には持続可能な教育に関する記述が含まれているにもかかわらず、保育者養成課程で用いられている教科書の約半数においてESDという言葉や概念が記述されていないことを明らかにした。⁷⁾

山村（2019）は、保育内容には5つの領域があり、その中の1つである領域「人間関係」が領域「社会」からなぜ変遷していったかを明らかにした。また、領域「人間関係」の授業で学生に「人のつながり」について問いかけ、持続可能な開発のための教育（ESD）における「人と人とのつながり」「人と社会とのつながり」「人と環境とのつながり」という観点から課題解決について領域「人間関係」を検討した。⁸⁾

倉持（2020）は、SDGsの子どもに関する内容を検討し、家庭科の保育領域で学ぶ内容を整理し、家庭科の保育学修の学びがSDGsとどのように関連しているのかを考察した。家庭科保育学習の学びとSDGsとの関連性においては、家庭科の保育学習の乳幼児をケアするために必要な知識や技能を身につけるような次世代育成の面があるとしたうえで家庭科の学習そのものが持続可能な社会を実現することと結びついていると述べている。⁹⁾

木戸（2021）は、持続可能性に向けた保育をめぐる国際的な議論について概観し、持続可能な開発のための教育SDGs達成に向けて、その特徴をユネスコの報告書をもとに整理した。その中で、新しい国際的枠組みである「ESD for 2030」の特徴とされる「①持続可能な文化の熟成」「②共感と慈愛（compassion）に基づく変容的行動の促進」「③本質的な問いとともに持続可能な暮らしを営む」の3点をもとに日本の文脈に沿って幼児教育・保育の分野から考察を試みた。¹⁰⁾

浅野（2022）は、保育施設において取り組むことの出来るSDGsの具体的な活動内容について検討した。SDGs先進国北欧スウェーデンの就学前学校の保育実践と比較しながら日本の幼稚園教育要領（2018）や保育所保育指針（2018）の領域「環境」のねらいと内容をスウェーデンのナショナルカリキュラム（Lpfö 2018）のねらいと内容を吟味し分析・考察した。その結果、今後のカリキュラムや教材の課題に民主主義や環境保護の主旨を盛り込んだ内容やねらい、地域連携による多様な教材や人材育成の開発の可能性が示唆された。¹¹⁾

他に、後藤（2020）¹²⁾ 高橋・久保田（2021）¹³⁾ の研究がある。

以上の先行研究では、保育領域「環境」「人間関係」「健康」の視点から、持続可能な開発目標SDGsとの関わりが考察や検討されたものはあるが、領域「言葉」の視点から考察されたものはほとんど見当たらなかった。

Ⅱ. 問題と目的

2030年まであとわずかとなっている現在、SDGsについては、身近な市町村、都道府県など、地域でも盛んにその考え方が叫ばれるようになり、生活に浸透してきてより身近な目標にはなっている。しかしながら一方で、まだ完全には浸透しておらず、SDGsの考え方が推進されないまま今日に至っている分野も多いのではないだろうか。

SDGsの17目標の中で、本研究でとりあげた領域「言葉」との関連が深いと考えられるのは、「4. 質の高い教育をみんなにすべての人々に包摂的かつ公平で質の高い教育を提供し、生涯学習の機会を促進する」と169のターゲットの中では「4.2 2030年までに全ての子どもが男女の区別なく、質の高い乳幼児の発達・ケア及び就学前教育にアクセスすることにより、初等教育を受ける準備が整うようにする」である。また、SDGsの子どもに関連する課題の中でとりあげたい目標は、「不平等、格差をなくすための目標4（教育）」についてである。²⁾

周知されているように、2017年に幼稚園教育要領と保育所保育指針の改定がそれぞれ行われ、幼児教育については整合性が図られ、我が国の就学前の幼児はどこにいても等しく幼児教育を受けられることとなった。⁶⁾ これを受け各保育施設においては、質の高い幼児教育を目指し、一人一人への幼児理解のもと、各領域からの保育実践が計画をもとに実践されていると思われるが、実際のところ、幼稚園、保育所、認定こども園など各保育施設の現場ではどのような実践がなされているのだろうか。となくSDGs17の目標の中では、「エコな暮らし」「エネルギー生活」「食生活」等が日常生活と結びついているためか取り上げられることが多く、そのため日常生活においてはどうしても自然環境やエコ等に焦点が当たっているようである。そのためか

保育現場においても御多分に漏れず、SDGsと関連が深い領域としては「環境」に焦点が当たることが多く、保育実践から見ると領域「環境」の割合が多いと推察される。⁷⁾

Ⅲ 調査

SDGsに関する保育者養成課程での教育の現状を探るために、教科書の内容を調べる調査と、受講生である学生の意識を探る2つの調査を行った。

Ⅲ-1 領域「言葉」におけるSDGs導入の現状についての調査

Ⅲ-1-1 方法

本研究の目的の一つとして、SDGsの考え方が保育者養成課程でどのように取り入れられているのかを明らかにしていきたいと考えた。そこで谷口（2016）⁷⁾を参考に、保育者養成課程で使用されている領域「言葉」の教科書においてSDGsやESDに関する記述がなされているかを調査した。調査対象の教科書は、SDGsが2015年9月国連サミットで加盟国の全会一致で採択された2016年以降に出版され、筆者が令和6年7月現在で入手できた、保育者養成課程で用いられている書籍から任意で選び出した^{15)~21)}。

Ⅲ-1-2 結果と考察

現在、保育者養成の現場で用いられている教科書でのSDGsへの言及を分析した結果は表1の通りであった。

本研究で参考にした谷口（2016）の調査は、保育者養成課程で用いられている領域「環境」教科書の約半数においてESDという言葉や概念が記述されていないことを明らかにした。⁷⁾ 本研究において実施した保育者養成課程で使用されている領域「言葉」の教科書においてもこれからの社会やICTに関連する記載はあったが、ESDやSDGsについての記載は見当たらなかった。また、領域「言葉」や言葉の機能や発達に関して

表1 保育者養成課程で用いられている教科書におけるSDGsへの言及

教科書	領域言葉	言葉の機能・発達	関わり指導	児童文化	ESD SDGs	これからの社会・ICT	配慮を必要とする関わり
教科書 a	○	◎	○	◎	—	—	○
教科書 b	◎	◎	◎	○	—	○	—
教科書 c	◎	◎	○	◎	—	—	○
教科書 d	◎	◎	○	◎	—	△	—
教科書 e	◎	◎	○	○	—	—	◎
教科書 f	◎	◎	○	○	—	○	○
教科書 g	◎	◎	○	◎	—	○	○

内容とともに詳しい記述があったもの「◎」、記述があったもの「○」、内容までは記述されていなかったもの「△」、記述がなかったもの「—」として分類した。

は、教科書の中心的な内容となるので、どの教科書にも丁寧な記載がなされていた。絵本や紙芝居などの児童文化に関連するものも充実した記載があった。配慮が必要とする関わりとしては、構音障害、吃音なども含めた障がいによる言葉の遅れや園生活の支援など、個別の支援や関係機関の連携を記載したものがほとんどであったが全く記載がない教科書もあった。保育者と子どもの関わり、子どもと子どもとの関わりなどについての記載は、どの教科書も事例などを織り混ぜながら丁寧な記載があった。

幼稚園教育要領の前文には、「これからの幼稚園には、学校教育の始まりとして、こうした教育の目的及び目標の達成を目指しつつ、一人一人の幼児が、将来、自分のよさや可能性を認識するとともに、あらゆる他者を価値ある存在として尊重し、多様な人々と協働しながら様々な社会的変化を乗り越え、豊かな人生を切り拓き、持続可能な社会の創り手となることができるようにするための基礎を培うことが求められる」とある。この「持続可能な社会」とはいうまでもなくSDGsに関わるものであり、子どもたちには将来、SDGs17の目標を達成するべくその担い手となることが期待されている。

中学校でも家庭科の授業などではSDGsを取り上げ、生徒一人一人が「自分は何ができるのか」「自分なりに解決策を見つけることができるのか」「解決に向かうためには自分は何ができるのだろうか」等々、小学校や高等学校などの学校現場でも17の目標をベースに、それぞれの取り組みを推し進めている授業が増えてきていると推察される。⁴⁾しかし、これまで幼児教育でESDが進んでいることが評価されているにもかかわらず、保育者養成課程の教科書にESDやSDGsの記載がないことについてはこれから改善が必要であると考えられる。

Ⅲ－２ 保育者養成課程短期大学生のSDGsや保育内容等についての意識調査

現在、保育者養成課程で学ぶ短期大学生のSDGsへの関心や保育領域との関わりについてアンケート調査を実施した。

Ⅲ－２－１ 方法

調査方法：授業終了時に、学生にグーグルフォームへ

メールを送信し、記入後の返信を集計した。その際、学生には、本研究以外の目的で使用しないことを伝え了承を得た。

対象者：東北地方のU短期大学幼児教育科で保育を学んでいる短期大学1年生29名、2年生26名。

1年生は、入学後の1年次前期課程で、教育原理や保育原理とともに、幼児と言語など5領域の基礎を学んだばかりであり、実習は未経験である。2年生は、入学後ほぼ1年半の学修を終え、幼稚園・保育園・福祉施設での実習も経験済みである。

調査期日：令和6年8月 前期末の授業時間を利用

アンケート内容は以下の通り。

- | |
|---|
| <p>(1) 持続可能な開発目標 (SDGs) についてお答えください。</p> <p>問1. 持続可能な開発目標 (SDGs) を知っていますか。「はい」「いいえ」で答えてください。</p> <p>問2. 「はい」と答えた方に質問です。持続可能な開発目標 (SDGs) について知っていることを記述してください。(自由記述)</p> <p>問3. 保育と持続可能な開発目標 (SDGs) は関連があると思いますか。「関連がある」「関連がない」で答えてください。</p> <p>問4. 「関連があると思う」と答えた方に質問です。保育の領域の中で、持続可能な開発目標 (SDGs) と一番関連があると思われる領域を選んでください。</p> <p>問5. 「関連があると思う」とお答えした方にお聞きします。4で選んだ領域とどのような関連があると思いますか。(自由記述)</p> <p>(2) 日常生活と 持続可能な開発目標 (SDGs) についてお答えください。</p> <p>問1. 日常の生活において、持続可能な開発目標 (SDGs) について実践していることがあればお答えください。(自由記述)</p> <p>問2. これから 持続可能な開発目標 (SDGs) は、生活の中でどのようなことに生かされていくと思いますか。(自由記述)</p> <p>問3. その他 持続可能な開発目標 (SDGs) について意見等あれば自由にお書きください。(自由記述)</p> |
|---|

設問(1)は、SDGsに関する知識や関心について、設問(2)は日常生活での実践など、教育の背景となる基盤的な知識や関心について調査することを目的として設定した。

Ⅲ－２－２ 結果と考察

学生へのアンケート回答を分析した結果は、図1の通りであった。

設問(1)問1「SDGsを知っているか」

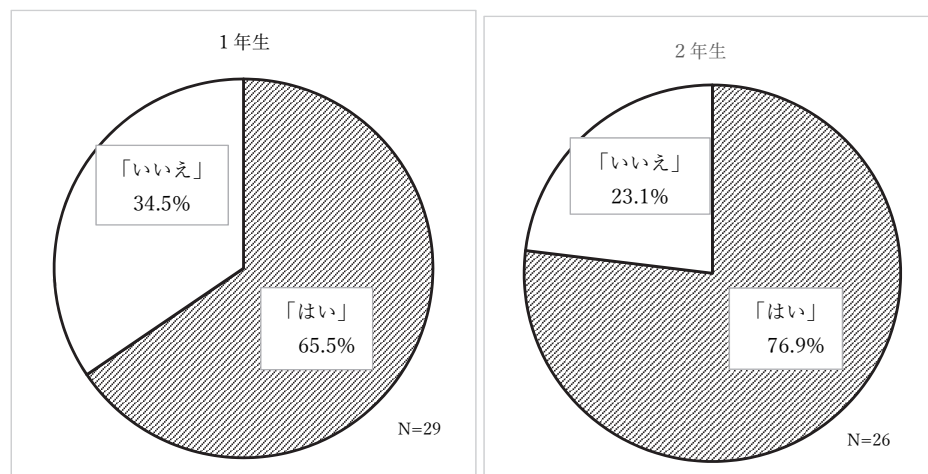


図1 「SDGsを知っていますか」への回答者数

(1) 問1では、1年生65.5%、2年生76.9%がSDGsを「知っている」と回答を得た。

統計的に有意な差ではないが、2年生の方が知っていると答えた。

(2) 問2「SDGsについて知っていることを記せ」

この質問の回答内容と文字数を示したのが次の表2である。

表2 「SDGsについて知っていること」の回答内容と文字数

1年生

回答内容	文字数
高校の時探究した	8
いろいろな内容が、色分けされて表されている	21
項目がいくつかあって世界全体で取り組む目標だということ	27
2030年までに達成すること目標にしている	21
世界の根本的な問題を解決するための目標	19
持続可能な社会にするための達成すべき17の項目を示したもの。	30
ECO	3
エコ リサイクル	8
水や電気の使いすぎを防ぐ	12
節水節電、資源の節約	10
ジェンダー平等	7
多様性の社会	6
飢餓をなくそう	7
貧困、差別、餓死、ジェンダー	14
貧困や環境、人種差別などについての目標を掲げている。	26
貧困をなくそう つくる責任つかう責任	18
海を綺麗にしよう	8

2年生

回答内容	文字数
17個の目標がある。	10
17個目標があり高校の授業で取り扱ったことがある。	25
17項目の目標があげられている	15
2030年までに目標を解決していくためのもの。	23
2030年までに目標達成する的な感じ	18
地球を守るため(?)の目標が17個あること。	22
国連で定めた2030年まで達成しなければいけない17の目標、確か	32
持続可能な開発をするための12と36の目標 目標未達の罰則なし	31
人類がこの地球で暮らし続けていくために、2030年までに達成すべき目標。 17の目標がある。	46
SDGsには2030年までに達成すべき17の目標が掲げられている。SDGsの目的は、貧困を終わらせ、地球環境を守り、すべての人々が平和と豊かさを享受できる世界を実現することである。	90
持続可能な世界を目指す為の目標 ex.ジェンダー、国や性別、人種などの差別をなくす	41
男女平等やごみについてだったり何項目かあるもの。 これからの地球に対して大事なもの	41
男女平等	4
サステナブルの時代、多様性を理解するなど	20
リサイクル、エネルギー確保、食料自給、人口増加、貧困なくそう	30
飢餓をゼロにする、ジェンダーを平等に、つくる責任・つかう責任、質の良い教育、フードロス無くす	46
CO2排出削減みたいなやつ	13
地球温暖化が進んでいるため、地球の温度を下げるための活動を行う	31
エネルギー、海	7

ここで「文字数」は、学生がスマートフォンの回答欄に自由に記述した文章の文字数である。この文字数は、単純に文字数をカウントしたものであり、句読点を含んだり英数字も漢字かな文字も区別したりしていない。しかし、回答内容を見ればわかるとおり、単語数と非常に高い相関を持つ指標と考えることができる。この文字数は、質問に関する回答者の知識の他に、考えを表明する意欲や授業への参加意欲も含まれると考えられるが、質問への知識や関心の程度を近似的に表す定量的指標と考えて、分析に採用したものである。

回答者の知識や関心の度合いを示すと考えられた文字数について学年間を比較すると次の図2のようになった。

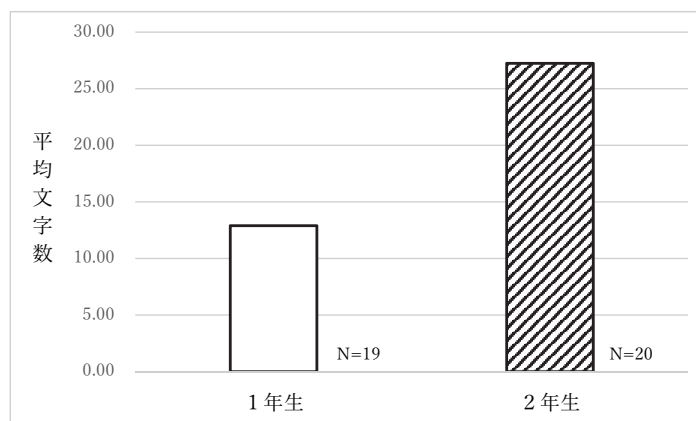


図2 「SDGsについて知っていること」の回答の平均文字数

SDGsの知識や関心を示す文字数を比較すると、1年生（平均12.89）と2年生（平均27.25）には統計的に有意な差があった（Welchのt検定、 $t=2.91$ $df=27$ $p<0.05$ ）。

1年生と2年生の違いは、文字数だけではなく、質的にも違いがあるようである。1年生の回答は、明確な内容は数少ない。ほとんどが貧困、餓死、人種差別、ジェンダー、エコ目標について等、なにかしら知っていることを回答した。2年生の回答は、1年生同様に貧困、餓死、人種差別、ジェンダー、エコ、目標等についての記述がほとんどではあるが、1年生と比較すると、知識の広がりや正確さの増加がみとれる。

(3) 問3「保育とSDGsは関連があると思うか」

この質問の回答は図3の通りであった。

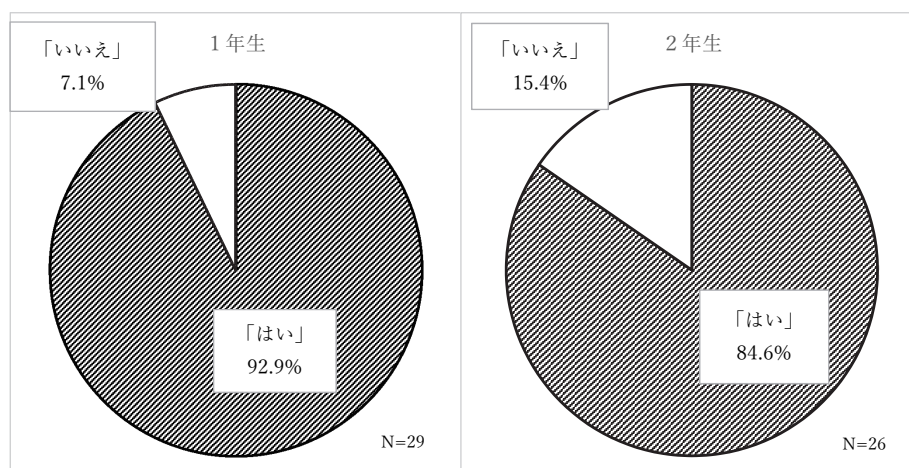


図3 「SDGsと保育は関連があると思うか」への回答

この質問に対しては、1年生の方がSDGsと保育は関連があると考えているという結果だが、この差は統計的に有意なものではない。次の問4への回答内容を勘案すると、むしろまだ学修が不十分でSDGsと保育の関連を把握できていないがゆえに、1年生は「関連あるだろう」と応えてしまった可能性も考えられる。

- (4) 問4「前の質問でSDGsと保育は関連があると答えた人は、SDGsと一番関連があると思われる保育の領域を示しなさい」

この質問に対して、SDGsと関連があると回答された領域は次の図4の通りであった。

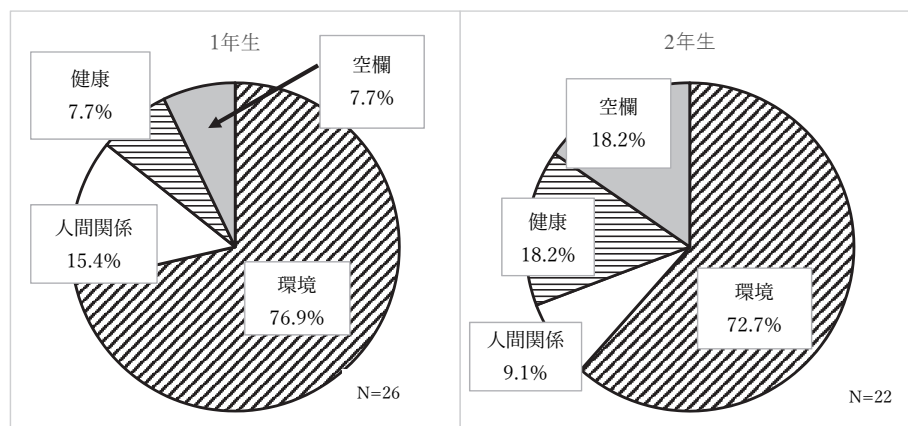


図4 SDGsと関連があると思う保育の領域

関連があるとされた領域について、学年間に多少の違いはあるが、「環境」が過半数を占めた。その内容について、次の問への回答をみよう。

- (5) 問5「関連があると答えた人は、選んだ領域とどのような関連があると思うか記せ」（自由記述）
この質問の回答内容と文字数を示したのが次の表3である。

表3 関連があると答えた保育の領域とSDGsとの関連についての回答内容と文字数

1年生

領域	回答内容	文字数
環境	エコな環境づくり	8
環境	ジェンダーの事など、環境的に関わる部分が多いと感じたから	28
環境	安全に過ごせる場所がない地域もあるから	19
環境	海や陸の豊かさや住み続けられる街づくり	19
環境	節約やりサイクル	8
環境	環境	2
環境	環境によい	5
環境	環境汚染	4
環境	環境整備などが関係してるから	14
環境	成長に関する適切な環境で養育する。	17
環境	子どもの安全のための	10
環境	自然が悪化すると子どもが触れ合う機会がなくなってしまう	27
環境	捨ててしまうものを使ってものづくりをすると資源を大切に使える	30
環境	水や紙の使いすぎを減らせると思う	16
健康	病気について	6
健康	貧困などと関わりがあると思ったから	17
人間関係	グローバル化が進んできて、多国籍の子供も日本に来ているから。	30
人間関係	グローバル化が進んでるため黒人、外国人差別をしないなど	27

2年生

領域	回答内容	文字数
環境	リサイクルのものなどを使って遊んだりする。	21
環境	園での遊びの環境作りや、安全に配慮した環境構成など	25
環境	家庭の貧困問題	7
環境	環境は自然に関することについて学び子どもたちでも花など植え地球温暖化を防止できると思う。	44
環境	環境を学ぶ、環境の中で遊ぶこと	15
環境	環境格差、体験格差、経済格差、虐待…子どもの産まれ育った環境によって子ども意思関係なく左右されてしまう。	52
環境	環境問題が関係していそう	12
環境	今は難しい調べないと	10
環境	子ども達が安全に遊べる環境がなくなってしまうかもしれない。	29
環境	子供たちの遊ぶ環境が地球に優しく、子供たちの安全な遊び場をつくることに関連してると思った	44
環境	自然の環境ということで、自然から学ぶことは多いと思うため海のゴミを無くしたりする活動や地球温暖化のために行っている活動など子どもが活動したり生活する時に関係があると思った。	86
環境	保育活動を行う時に環境構成などを取り入れるため	23
環境	幼少期からの経験は一生のものになると思います。色々な人(性別、国籍)がいることによって人としての成長になると思うからです。	61
健康	「水分を平等に摂取する」というような内容と関連があると思う。	30
健康	健康管理	4
健康	食育によって、健康な体を作ることが出来る。	21
人間関係	SDGsに平和と公正をと言う目標があります。障害がある子供でも、あるなしに関わらず仲良く遊べることについて、保育が関係していると思いました	69
人間関係	多様性を理解する。インクルーシブ。	17

この質問についての知識や関心を示す文字数について、学年間を比較したのが図5である。1年生の平均文字数(11.04)と2年生の平均文字数(25.91)には統計的に有意な差があった(Welchのt検定、 $t=2.67$ $df=28$ $p<0.05$)。

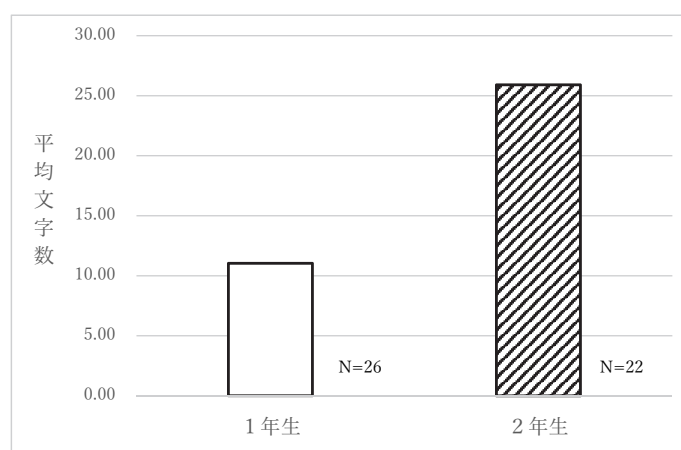


図5 領域とSDGsとの関係についての回答の平均文字数

回答の内容については、1年生の自由記述による回答は、そのほとんどが環境に関するものであった。その他貧困、病気、人種差別、エコ節約についての回答があった。

2年生の回答は、1年生と比較すると多様性の理解、インクルーシブ等の多岐にわたり具体的な回答もあった。

文字数と回答内容から、2年生はSDGsについて、より細かく知るとともに、子どもの園での活動まで言及するなど、知識や関心が広がり、他の学修とともに保育を中心として知識の体系化が進むことがうかがえる。ただし、その領域は、あくまでも「環境」が中心であり、特に「言葉」についてはまったく関係が見出されていない。

(6) 設問 (2) 日常生活とSDGsについて

問 1. 「日常の生活において、SDGsについて実践していることがあれば記せ」(自由記述)

この質問に対しては、1 年生では18人から平均文字数11.72文字、2 年生では19人から平均文字数11.21文字の記述回答があった。人数も文字数も、ほぼ同じであり、統計的にも差はない。内容も、リサイクル、節水節電等のエコ生活、ゴミの分別、食品ロスの削減等、ほとんどが環境に関する似たような回答が多数あり、学年間の相違は見いだせなかった。やはり、日常生活での実践となると、知識として知っていても具体的に行動に結びつけるのが難しいのは学生に限ったことではないであろう。

ただし、各一人ときわめて少数であったが、「差別をしない」や「ユニバーサルスポーツを学んでいる」という多様な人々へ配慮した行動を実践している例もあった。

**表4 「日常生活でSDGsについて実践していること」の主な回答内容
(似た内容が多かったので集約した結果)**

リサイクル。資源を無駄使いしない。
車を使わずに自転車を使う。なるべく歩く
食品ロスをなくす。
節水や節電
差別しない
ボランティアでユニバーサルスポーツについて学びながら、体験のサポートをしています。

(7) 問 2. 「これからSDGsは、生活の中でどのようなことに生かされていくと思うか」(自由記述)

この質問に対する回答は、表5の通りである。

**表5 「これからどのようにSDGsは生活の中で生かされていくと思うか」の回答内容
これからのSDGsと生活に関する問への回答と文字数**

1 年生

回答内容	文字数
環境が良くなる	7
環境に優しく	6
環境を整えたりなど暮らしやすくなる	17
省エネ、地球温暖化防止を防ぐことができる	20
節約や環境が良くなる	10
性別に対して偏見を持たない	13
多様性の社会を生きていく上でいろいろな考え方ができるようになると思います。	37
地球温暖化	5
地球温暖化が防げる	9
貧困、環境	5
平和な世界	5
暮らしやすいようになる	11

2 年生

回答内容	文字数
17個の目標を意識していくことで、より良い生活を送ることが出来ると思う。	36
SDGsの目標を意識して生活することでより早く目標が達成されると思う。	35
環境や人の気持ちを考える	12
環境問題。人種差別をしないなど。	16
公害病(水俣病のような病気)にならなくなること。	24

地球温暖化による気温の上昇防止。 健康な体を作ることができる。	31
地球温暖化対策に生かされていく	15
地球温暖化防止や環境が整うと思う	16
発電など	4
自給自足率をあげる。	11
自分で完結できる事以外全て	13
常識を持つことができる。	12

この質問に対しては、1年生では12人から平均文字数12.08文字、2年生では15人から平均文字数16.87文字の記述回答があった。人数も文字数も、1年生よりも2年生が多く回答したが、統計的にも差はない。

1年生も2年生も、環境に関するものが多かったが、貧困や多様性、人種差別など具体的課題をあげる回答が目についた。

先の問の回答にみられたように、日常生活で実践することは難しくても、今回調査した学生の少なくとも約半数は、解決に向けて努力しなければならないという意識を持っていることがわかった。

(8) 問3.「その他、SDGsについて自由に記せ」
(自由記述)

この欄への回答は少なく以下の3件のみであった。

「無理のない範囲での目標がいい」

「無理な目標でも近づく努力が大切」

「まだSDGsについて知らない人もいると思うため広める活動をするといい」

ここで回答が少なかったのは、アンケートの末尾で回答に疲れたり飽きたという一般的な傾向が出た可能性もあるが、SDGsが、自由な意見を求められて回答が続出するような、切迫した課題とは認識されていないことを反映していると考えられることもできる。

保育者養成課程に学ぶ短期大学生のSDGsと保育との関連についての意識調査では、SDGsと関連する領域として領域「環境」への意識が高いことが示された。これは、高校教育までのSDGsに関する教育も短大での保育に関連する教育でも、SDGsといえば環境に関連する事項が圧倒的に多いのが現状だから当然の帰結でもある。しかし、保育だけでなく、様々な学修を積んだ短期大学2年生になると、SDGsは環境から踏み出して多様性の問題などに広がっていく傾向をみとることができた。保育者養成課程において、領域「環境」ととどまらず、より広く連携して教育することで、

より質の高い教育を展開できる可能性を示すものと考ええる。

幼児教育・保育における領域「言葉」の意義は、子どもたちが言葉を使うことで、聞き、話し、考え、伝える喜びを感じてもらうよう、教育・保育していく工夫をすることにあると考える。

2024年の現在、日本でも外国人、外国語を話す人々に接する機会が、最近では非常に増えている。その中には子どもたちもいる。多様な人々が公平に交流しながら平和な社会を実現するというSDGsの目標達成には、子どもたちを含む多くの人々のコミュニケーション力を高めることが必須の課題となる。

SDGsは領域「環境」だけでなく、他の領域「健康」「人間関係」「言葉」「表現」とも関連していること、さらにいうならば幼児教育の保育現場においては、SDGsを実現するために、持続可能な社会の創り手となることができるように理解を深め、「聞く」「考える」「話す」「伝える」など、「言葉」の基礎を培うために領域「言葉」指導の意識を高めていくことが、保育の質を高める教育に必要であると考えられる。

さらに保育者養成課程の学生は、今自分ができると、これからできることを学び、こうした学びそのものがSDGsを考えることの基盤となるという意識をもつことが大事だと考える。

IV. まとめ

本研究では、保育者養成課程で使用されている領域「言葉」の教科書におけるSDGsへの言及の程度を調査するとともに、保育者養成課程で学ぶ短期大学生のSDGsに関する意識を調査した。その結果、保育者養成課程で使用されている領域「言葉」の教科書にはSDGsについてほとんど記載はなく、短期大学生の意識もSDGsに関しては、領域「環境」に関するものが多く、領域「言葉」への関心がほとんどないことが示された。このような本研究の調査結果からも分かるように、SDGsは、日常生活と結びついている自然環境やエコな暮らしなどに焦点が当たっているものがほと

んどであるため、SDGsと関連が深い領域としては領域「環境」にどうしても焦点が当たってしまうことが窺える。

幼稚園教育要領の前文には、「持続可能な社会の創り手となることができるようにするための基礎を培うことが求められる」とある。⁶⁾ この「持続可能な社会」とは、いうまでもなくSDGsに関わるものであり、子どもたちは将来、SDGs17の目標を達成するべくその担い手となることを期待されている。それを可能にしていくにはSDGsについて、子ども一人一人いや子どもを育てる保育者一人一人がSDGsについて理解を深め、意識を高めていくことが必要であると考え。このSDGsの考え方を取り入れた保育内容を実践していくためには、保育現場の保育者一人一人のSDGsの理解や意識が欠かせない。

藤井（2021）は、「持続可能な社会の創り手として必要とされる資質・能力について、基本となるものはこの世界について心が動くことが学びの原点であり、自分の心の動きに自信をもち、自分から世界にはたらきかけ、自分の言葉で捉えることで学びが開始され、“このようにすればもっとうまくできる”と自分から動いて知識を修正的に増大させ主体的な学びが展開される」と述べている。¹⁴⁾ この藤井による「自分の言葉で捉える」ことで学びが開始されたという姿は、先の中学校の研究の成果と重なりと考えられる。中学校では、“よりよい生活を目指す視点で自分の生活を見つめさせ、生活の中の課題がSDGsのどの目標と合致しているのかを考えさせるところから始めたことで、生徒が主体的に問題解決に取り組むことができた” また、“批判的思考力の育成が重要であると考え、問題解決的な学習の流れの中にいくつかの問いを提示し、様々な角度から論理的に考え判断する場面を意図的に設けたことにより、これまで解決策が見つければ満足していた生徒たちがさらに最適解を求めて探求する姿が見られた” という成果である。ここで考えるべきことは、そのいずれの場面においても中学生らは、友達の意見を“よく聞き”“自分で考え”“自分の言葉で話し”“伝え合う”という学びの姿があったということである。すなわち中学生らはこの学習過程において、「自分の言葉」で捉えていたということである。

倉持（2020）によると、「家庭科の保育学習の学びとSDGsとの関連性において、家庭科の保育学習の乳幼児をケアするために必要な知識や技能を身につけるような次世代育成の面があるとしたうえで、家庭科の学習そのものが持続可能な社会を実現することと結び

ついているといえる」と述べている。さらに保育学習で子どもの発達を学ぶことは、自分とのつながりの中で乳幼児を捉え学んでいくことができ、発達の土台となるアタッチメントも同様であるとしたうえで、乳幼児を育む人的・物的環境の重要性について学び、自分の今できること、これからできることを学び、こうした学びがSDGsを考えることの基盤となるのではないだろうか」と述べている。⁹⁾

以上のことから、領域「言葉」の“ねらい”“保育内容”“内容の取扱い”にある「言葉を交わす喜びを味わう」「よく聞くことで言葉による伝え合いができる」「言葉に対する感覚が養われる」「言葉が豊かになる」「文字などを使いながら思ったことや考えたことを伝える喜びや楽しさを味わい文字に対する興味や関心をもつようにする」など、これら全てがSDGsと関連し、領域「言葉」の学びそのものが持続可能な社会を実現することにつながっていると考え。さらに言うならば、幼児期の子どもにとっては、領域「言葉」で経験し学ぶこと、すなわち藤井による「自分の言葉で捉える」という経験が、幼児期には必要なのである。言葉の獲得は、人との関わり、他者とコミュニケーションをとることで初めて学びとなる。子どもと保育者との対話、子ども同士の対話などから、子どもは「聞く」「考える」「話す」「伝える」などの「言葉」の基礎を培っていく。そのために保育者は、子どもの興味や関心に寄り添いながら、子どもが自分で考えた言葉で表現できるような場を整えていくことが必要である。

SDGsは2030までを目標としているが“幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿”と同様、目標に到達することが目的ではなく、SDGsに関する観点を意識し、この観点で保育を進めていくといった過程が、保育をより豊かにし、同時に保育の質も向上していくと考える。そのためには領域「言葉」指導へのSDGsに関する観pointsの導入は必須であり、未来の保育者として学んでいる保育者養成課程の学生一人一人が、SDGsの理解を深め、「聞く」「考える」「話す」「書く」などの「言葉」の基礎を培うことが重要であると考え。

謝 辞

本研究を実施するにあたり、羽陽学園短期大学渡邊洋一教授には、研究データ分析の協力を賜りました。ここに改めて感謝申し上げます。ありがとうございました。

【引用文献／参考文献】

- 1) 外務省ホームページ「JAPAN SDGs Action Platform」
<https://www.mofa.go.jp/mofaj/gaiko/oda/sdgs/index.html> (2023年8月1日閲覧)
- 2) ユネスコ国内委員会 www.mext.go.jp/unesco
 (2022年8月1日閲覧)
- 3) 文部科学省 (2018) 中学校学習指導要領 (平成29年告示) 解説 技術・家庭編. 開隆堂出版.
- 4) 鎌田弘子 (2021) 主体的に問題を見だし、課題を解決する力を育む授業の研究 持続可能な社会の構築に向けて. 山形技術・家庭科研究会 (山形大学附属中学校).
- 5) 上垣内伸子 (2022) 日々の保育実践に見いだすSDGsとESD. 幼児教育じほう, 49 (11).
- 6) 文部科学省 幼稚園教育要領 (平成29年告示). 50-73. 142-144. 213-232. 286.
- 7) 谷口一也 (2020) SDGs時代の幼稚園教育領域「環境」のあり方. 教育総合研究叢書13, 137-146.
- 8) 山村けい子 (2019) 保育内容「人間関係」持続可能な開発のための教育 (ESD) の観点から. 兵庫大学短期大学部研究集録, 54, 9-18.
- 9) 倉持清美 (2020) 家庭科の保育学習とSDGs. 日本家庭科教育学会誌, 63 (3), 157-160.
- 10) 木戸啓絵 (2021) 持続可能性に向けた保育をめぐる諸外国の動向. 岐阜聖徳学園大学短期大学部紀要, 53, 1-14.
- 11) 浅野由子 (2022) 持続可能な開発目標 (SDGs) の視点から考察する 保育「環境」の重要性－領域「環境」のカリキュラム・教材開発の可能性から－. 日本女子大学大学院紀要, 家政学研究科・人間生活学研究科, 28, 225-231.
- 12) 後藤由美 (2020) 「子どもの健康と安全」における乳幼児の事故防止につながる安全教育教材の実践～保育施設におけるESD・SDGs活動の一環とした安全教育に着目して. 愛知みずほ短期大学. 瀬木学園紀要, 16, 63-69.
- 13) 高橋健司・久保田秀明 (2021) 生命の価値に触れる自然体験教育のSDGsの視点からの考察 乳幼児期における「食農自然保育」の意義について. 創価大学教育学論集, 73, 189-205.
- 14) 藤井千春 (2021) 子どもと教育 持続可能な社会の創り手を育てる. 初等教育資料9, 4-5.
- 15) 岸井隼雄・無藤隆・湯川秀樹 監修 (2018) 保育内容・言葉 第三版. 同文書院.
- 16) 無藤隆・宮里暁美 (2018) 新訂事例で学ぶ保育内容〈領域〉言葉. 萌文書林.
- 17) 駒井美智子 (2019) 保育者をめざす人の保育内容言葉 第2版. (株) みらい
- 18) 大越和孝・安見克夫・高梨珪子・野上秀子・齋藤二三子 (2018) 保育内容「言葉」改訂新版 言葉とふれあい 言葉で育つ. 東洋館出版.
- 19) 谷田貝公昭・廣澤満之 編著 (2018) 新版 実践保育内容シリーズ4 言葉. 一藝社.
- 20) 馬見塚昭久・小倉直子 (2018) 保育内容「言葉」指導法. ミネルヴァ書房.
- 21) 齋藤政子 (2023) 保育内容「言葉」と指導法 理解する・考える・実践する. 中央法規出版.
- 22) 秋山宏次郎 (2022) 今日から実践 保育で取り組むSDGs. 新星出版社.
- 23) 上垣内伸子 (2023) 『持続可能な社会の創り手に求められる「人と関わる力」とは. 幼児教育じほう, 51 (5).
- 24) 富田久枝 (2022) 持続可能な社会を創るための乳幼児教育. 幼児教育じほう, 50号 (9).
- 25) 河邊貴子 (2023) 持続可能な社会と保育 SDGs時代の保育を考える. 保育学研究, 61 (3).
- 26) 井上美智子・登美丘西こども園 (2020) 持続可能な社会をめざす0歳からの保育 環境教育に取り組む実践研究のあゆみ. 北大路書房.
- 27) 富田久枝・上垣内伸子 他 (2018) 持続可能な社会をつくる日本の保育 乳幼児期におけるESD. かがわ出版.
- 28) 無藤隆 (2018) 幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿. 東洋館出版.
- 29) 文部科学省 (2021) 幼児の思いをつなぐ指導計画の作成と保育の展開. チャイルド本社.

